

政治的機会構造と抗議サイクル

——進化ゲームによる分析——

渡 邊 勉

1. 問題の所在

社会運動研究では、これまで運動の発生要因が最も重要な課題として位置づけられており、近年の研究においても、社会運動の発生を扱う研究が多い（野宮 1999）。しかし同時に、運動の時間的变化もこれまで多くの研究者が関心を寄せてきた。例えば集合行動論では、社会運動を、社会不安の準備段階→集合興奮のポピュラー段階→組織化段階→制度化段階、というような一連の図式によって描いた。近年では政治的機会構造論が、抗議サイクルに注目し、なぜ抗議サイクルが発生するのかが、ひとつの重要な研究課題となっている。ここで抗議サイクルとは、個別の運動の盛衰ではなく、個々の運動が影響しあい、また制度政治とも関わりながら形成される、比較的長い期間における抗議水準の盛衰のことである。抗議サイクル研究は、抗議サイクルと政治的機会構造の関係に焦点を当てて数多くの研究がおこなわれているものの、その生成メカニズムについて必ずしも十分な検討がなされているわけではない⁽¹⁾。

ところで社会運動論は、1960年代までの相対的剥奪論に代表される人々の感情に基づく説明図式から、1970年代の資源動員論以降、資源、機会といった構造に基づく説明図式へと大きく変化していった（野宮 2001）。特に1990年代以降、Tilly (1978) や McAdam (1982) の政治過程論を発展させた政治的機会構造論に理論的基盤をおく研究が、数多くおこなわれるようになった。政治的機会構造とは、「人々が集合行為をおこなう際にもつ成功や失敗への期待に影響を及ぼす誘因を提供する政治的環境の諸次元」(Tarrow 1994) と定義されるように、人々の運動成功の見込みを変化させる政治的要因のことである。つまり政治的機会構造論は、人々の運動成功の見込みを変化させる政治的要因が何であるのか、また政治的要因のどのような変化が社会運動を増加させたり減少させたりするのかを理論的、実証的に明らかにしようとしてきた。その際、主として個別の社会運動組織を取り上げるのではなく、マクロな社会運動全体の発生や変動を分析対象としてきた。今述べたように、政治的機会構造の定義では、人々の見込みの変化といったミクロな側面に焦点を当てているものの、研究者の関心自体は社会運動を取り巻く社会構造にあるため、実際の分析ではマクロ変数間の関係に焦点が向けられてきた。そのため、マクロ変数間の相関の背後にある具体的なメカニズムに関して、ミクロ水準からの十分な理論化はおこなわれてこなかった。

本稿は、こうした従来の研究の問題を踏まえ、抗議サイクルと政治的機会構造の関係に着目し、政治体と運動体の相互作用というミクロ的側面から抗議サイクルの生成メカニズムを明らかにしていくことを目的とする。つまり、政治体と運動体の間の相互作用をゲームとし

て捉え、そのゲームの帰結が時間的にどのように変化していくのかを明らかにしていく。具体的には、進化ゲーム理論によって、政治的機会構造と社会運動の増減の関係について明らかにしていく。

2. 政治的機会構造と抗議サイクル研究

2.1. 政治的機会構造論

政治的機会構造論は、1990年代に入って大きく発展した理論である。起源は、Eisinger (1973) のアメリカ43都市における暴動の比較研究であった。その後 Tilly (1978) や McAdam (1982) の政治過程論を経由して、1990年代以降大きく発展した。政治的機会構造論の基本的なロジックは、政治的機会構造が運動成功に対する人々の見込みに影響を与えることによって、社会運動が発生したり、しなかったりするというものである。政治的機会構造論では、政治的機会構造の変化を開放と閉鎖によって表現する。開放とは運動成功的見込みが高い政治的機会構造の状態を指し、逆に閉鎖とは運動成功的見込みが低い状態を指す。

現在政治的機会構造論は、2つの方向で研究が進んでいる。第1は、国家間比較を中心とした政治制度と社会運動の発生の関係を課題とする研究である。Kitschelt (1986), Kriesi et al. (1995) に代表されるように、国家の政治的機会構造の開放、閉鎖によって国家間で社会運動の発生にどのような差異があるのかを明らかにしようという試みである。第2に、一国内の政治的機会構造の変化とともに抗議サイクルの形成を課題とする研究である。Tarrow (1989), Koopmans (1995), Traugott ed. (1995) などの研究に代表されるように、抗議サイクルがなぜ生成するのかを明らかにしようという試みである。

政治的機会構造の定義に従えば、政治的機会構造の開放が社会運動を増加させることは明らかである。しかし実証研究においては、両者の関係はそれほど単純ではない。政治的機会構造が社会運動の増加に与える影響は、大きく3つの知見に分類されている。第1に、政治的機会構造の開放が社会運動を増加させるという知見である (Kitschelt 1986)。第2に、政治的機会構造の閉鎖が社会運動を増加させるという知見である (Kreisi et al. 1995)。第3に、複数の政治的機会構造の次元において、開放と閉鎖が組み合わさるときに社会運動を増加させるという知見である (Eisinger 1973)。このようにさまざまな影響関係が観察されるのは、政治的機会構造として取り上げられる変数が、単に運動の成否の可能性にのみ影響しているわけではないからだということを示唆していると考えられる (渡邊 2002, 2004)。そうであるならば、まずは政治的機会構造をあらためて定義しなおし、社会運動に対してどのような影響を与えるのかを厳密に再考していく必要があると思われる。

2.2. 抗議サイクル研究

次に抗議サイクル研究について概観しておくことにしよう。Whittier (1997) によれば、運動の変化、継続を説明する研究アプローチとして、3つのアプローチがある。第1に政治過程アプローチである。このアプローチは、運動の生成、発展、衰退のサイクルと、政治的開放性を引き出す戦略の変化を説明することを目的としている。特に外的要因による説明を試みる。例えば国家構造、政治的同盟の脆弱性、エリートの支援、資源の利用可能性、運動

参加者の戦術レパートリーなどである。第2に組織論的アプローチである。このアプローチは、社会運動（組織）の継続性に关心があり、資源動員論と組織生態学の統合に特徴がある。組織構造、イデオロギー、文化、正当性、環境変化、参加者のコミットメントといった要素を強調している。第3に世代アプローチである。このアプローチは、勧誘と集合的アイデンティティの内的ダイナミクスに焦点を当て、運動内で政治的世代とコーホートの移行がどのようにおこなわれるのかを明らかにしようとしている。次にそれぞれのアプローチの代表的な研究を簡単に紹介しておこう⁽²⁾。

(1) 政治過程アプローチ

(1)-1 . Tarrow (1989, 1994, 1995)

Tarrowは、抗議サイクルの発生を次のような過程によって説明した。まず先発運動によって政治的機会が開放する。政治的機会が開放することで、後発運動が続く。そして運動が増加していくと、運動セクター内で支持者の獲得をめぐる競争がおこり、それに伴って運動戦術の革新が進む。そして運動は競争の中で急進化していく。運動がピークを迎えると、政治体は穩健な運動を体制内に包摂し、急進的な運動を弾圧するようになる。こうして、包摂され、制度化された運動は体制内の改革をめざし、コストのかかる運動から離脱するようになる。一方で急進的運動は政治体の弾圧を受け、同時に支持者を次第に失っていく。こうした過程を経て、運動全体が衰退していく。つまりTarrowは、サイクルが政治的機会の変化と組織間競争によって生成されると考えている。

(1)-2 . Koopmans (1993, 1995)

Koopmansは、西ドイツのデータとオランダ、アメリカ、イタリアのデータを比較していくことで、抗議サイクル形成のメカニズムを2つの仮説から検討している。つまりTarrowによる組織競争仮説とKarstedt-Henkeによる政治的機会仮説の2つの仮説を検討し、政治的機会仮説が妥当することを明らかにした。つまり政府による運動の抑圧と促進がサイクルを形成するという結論に至った。しかし単純に政府の抑圧と促進のみが抗議サイクルを規定しているわけではなく、Koopmansはさらに、規模（表出的抗議）、斬新さ（対立的抗議）、攻撃性（暴力的抗議）の3つの要素からの説明を試みる。サイクルの初期では、斬新さが最も効果的なため、対立的抗議がおこなわれる。しかしそれに政治体がそれらの運動に対応できるようになると、運動は規模か攻撃性を増大せざるを得なくなる。そこで、数の増大へと運動は進み、穩健化、制度化していく。その一方で急進化した運動も発生し、両者が分離していく。Tarrowの議論と同様に、制度化と急進化が進行すると、運動は衰退していく。制度化した運動にとって、議会や政府に入り込んでいく方が、コストがかからない。一方急進化した運動は、弾圧が強くなり動員コストが高くなっている。さらに制度化した運動と急進化した運動の間で対立が生まれることで、運動全体が衰退していく。このようにKoopmansは政治的機会構造と運動戦術を組み合わせながら、抗議サイクルを説明しようと試みている。

(2) 組織論的アプローチ

(2)-1 . Edwards and Marullo (1995)

Edwards and Marulloは、トップスフィールド基金編纂の『草の根平和ディレクトリー』に掲載されている平和運動組織について、組織の盛衰がいかなる要因によって決定されるの

かを、組織生態学の知見に基づきながら検討した。その結果、組織の規模、継続年数、正当性が組織の盛衰に影響することを明らかにした。つまり規模の小さい組織、成熟した組織、インフォーマルな組織は、解散しやすいことを見いだした。その一方で文化的要素は組織の存続には影響がないことも明らかにした。さらに活動領域によって影響が異なることも明らかにした。以上のように Edwards and Marullo は、組織に着目することで組織の特性と存続の関係を明らかにしようとしている。

(2)- 2 . Minkoff (1997)

Minkoff は、1955年から1985年の間での、公民権運動の女性運動への影響を組織水準で検討し、抗議サイクルの形成のメカニズムを明らかにしようとした。そして、運動組織の拡大や密度が抗議サイクルにとって重要な要素であることを明らかにした。まず先発運動によって運動が発生すると、他の組織も活動をおこなうようになる。そこから運動が伝播していくのは、状況依存的である。つまり政治的同盟者の勧誘とエリートの応答性といった政治的機会構造が重要となる。例えばアメリカの運動では、民主党時代には運動が伝播していくが、共和党時代には伝播が限定的である。こうした政治的状況の影響に加えて、持続的なニッチの形成といった組織間関係も運動拡大には必要であることを明らかにした。

(3) 世代アプローチ (Whittier 1995)

Whittier は1969年から1992年までのオハイオ州コロンバスのフェミニズム運動を分析し、社会運動と政治世代、コーホートとの関係を明らかにした。第1に活動家の同一コーホートの集合的アイデンティティの時間的不变性、第2にコーホート間の集合的アイデンティティの異質性、第3に集合的アイデンティティ形成における運動内外の状況要因の影響を明らかにした。それを踏まえ、さらにコーホートの移行が運動に変化をもたらすことを示し、また集合的アイデンティティに関するこれら3つの特徴は、組織要因、政治的機会構造と相互関係があることを事例分析より明らかにした。

これらの研究は分析対象も分析目的も異なっている。しかし社会運動の時系列的な変化の主要な要因として、これらの研究から我々は共通する2つの説明要因を指摘することができる。まず政治要因である。政治的機会構造に代表される政治要因の変化が抗議サイクルや運動の時系列的变化を形成するという議論である。次に組織要因である。組織要因は組織内要因と組織外要因に分けられるが、組織間の競争や組織内の変化などが抗議サイクルや運動の時系列的变化を形成するという議論である。ここからわかるることは、政治過程アプローチ以外のアプローチが政治要因の重要性を指摘しており、また逆に組織アプローチ以外のアプローチが組織要因の重要性を指摘している点である。本稿では、先にも述べたように政治的機会構造のミクロ的基礎づけに主眼があるので、政治要因を中心に扱っていく。ただ運動組織間の伝播、競争もまたモデルに組み込んでいる。

3 . 政治体と運動体の相互作用としての政治的機会構造

以上の議論を踏まえ、具体的にモデルを構成していくことにする。本稿では、先にも述べたように抗議サイクルを政治体と運動体の相互作用から説明していくと考えている。そこでまず、政治的機会構造と政治体・運動体の相互作用の関係を明らかにしておく必要がある。

近年、政治的機会構造論に対する最大の批判の一つは、概念の拡散化に対するものである（野宮 2001）。また先にも述べたように、政治的機会構造が社会運動発生に与える影響は単に機会としての影響以外にも存在する可能性も考えられる。こうした指摘に答えるためには、政治的機会構造の特性を明らかにし、そこから政治的機会構造を再定義していくことが必要である。つまり具体的に政治的な場を設定し、その中で相互作用をおこなうアクターを想定することから始めることが必要であると考える（渡邊 2002）。特に政治的機会構造の定義において、運動側の成功に対する期待が重要な要素であったことを鑑みれば、社会運動をめぐる行為主体間の関係から政治的機会構造を定義していくことは重要である。

本稿では、渡邊（2002）に基づき、政治的機会構造を政治体と運動体の相互作用の場の中で位置づけ、政治的機会構造を2つの次元によって捉えることで、そのメカニズムを理論化

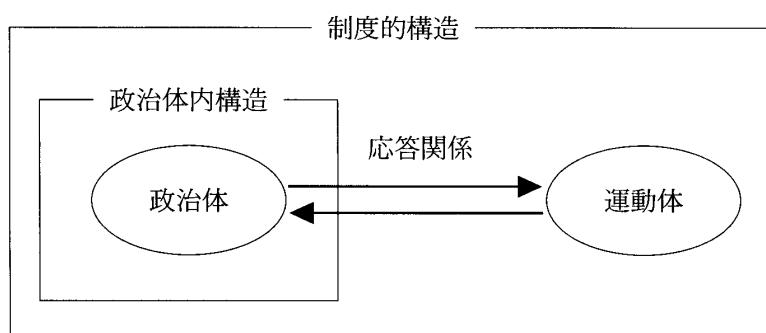


図1 政治構造（渡邊 2002）

していく（図1参照）。

第1の次元は、政治体と運動体の制度関係に関する政治構造（制度的構造）である。制度的構造は、選挙制度やコーポラティズムといった国家の政策決定への市民参加に関する基本的制度を指し、また運動発生のための基本的な制度的側面をあらわしている。つまり運動体と政治体の相互作用のための基本的枠組みである。第2の次元は、政治体内の性質（政治体内構造）である。McAdam (1996) の分類でいうところのエリート集団間の連合の安定性やMeyer (1993) の動的な政治的機会が該当する。例えば、議会内の政党分布や首長の性質などである。つまり政治体自体の性質によって生じる政治構造を指し示している。以上2つの次元は、大まかにいえば開放的一閉鎖的という軸によって特徴づけられる。ただしこの2つの政治構造は完全に独立して運動に影響を及ぼしているわけではなく、互いに関連していると考えられる。

さらにそれぞれの構造について詳しく検討しておこう（渡邊 2002）。まず制度的構造に共通する特徴は、運動体の政治体へのアクセス手段やその程度である。つまり運動をおこす際の選択肢の幅および選択の容易さを規定していると考えることができる。そのため、制度的構造が開放的であるとは、運動体にとって政治体への制度的なアクセス手段が増加している、あるいはアクセスが容易であることを示しており、閉鎖的であるとはその逆になる。つまり制度的構造の開放度とは、運動体の政治体へのアクセス手段の多様さ、アクセスのしやすさを指す。

一方政治体内構造は、制度的構造とは異なる性質を持つ。政治体内構造の特性は、大きく

2つの次元に分けられる。第1に運動体に対する政治体の相対的な権力の強さである。例えばエリートの分断と紛争 (Brockett 1991) や任意の運動に関する権力布置 (Kriesi et al. 1995), エリート内の分裂 (Tarrow 1994) などである。ただ、運動体にとって政治体が権力を持っているということが、政治体内構造の開閉に直接つながるわけではない。仮に政治体が運動体の要求に共鳴するような志向を持つのであれば、政治体の権力の強さは運動をおこした場合に運動発生において有利に作用するに違いない。逆に運動体の要求に対立的な態度を示す政治体であれば、政治体の権力の強さは運動を阻害する要因となるだろう。

つまり政治体と運動体の近接性という第2の次元が重要となる。元来社会の中の個人、集団は、さまざまな利害関係のもとにある。その利害関係は一つの要素によってのみ規定されるわけではなく、ある次元では対立しているが、別の次元では利害を共有していることもある。こうした利害関係が複雑に絡まった多次元空間上に人々（運動体）を位置づけることができる。こうした多次元空間上における政治体と運動体の距離が近接性である。距離が近ければ、政治体と運動体の利害は近く、ゆえに運動体の要求が受け入れられる可能性は高いと考えられる。政治体と運動体の近接性をあらわす具体的な変数として、同盟の存在 (Brockett 1991), 任意の運動に関する同盟（紛争）構造 (Rucht 1996), 政治的提携の安定性 (Tarrow 1994) などが挙げられる。なお同盟や提携の存在は、近接性が高いということをあらわしているといえるだろう。

以上のように政治体内構造の開閉が、政治体の権力の強さと政治体と運動体の近接性の2

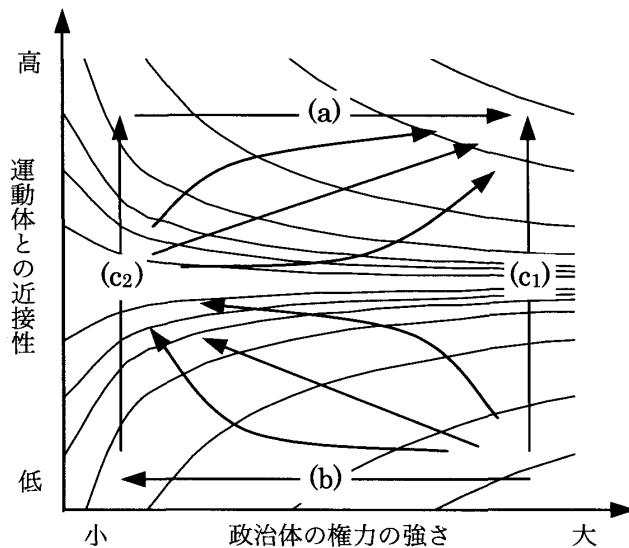


図2 政治体内構造の開放性（渡邊 2002）
(矢印の先端の方が開放性が高い、図内曲線は開放性の等高線をあらわす)

次元によって決定されると仮定すると、政治体内構造の開閉は図2のように表現される。

図内の矢印の終点の方が起点よりも政治体内構造の開放性が高いことを示している。例えば政治体と運動体の近接性が高い場合、つまり運動体の要求が政治体の政策と近い場合、政治体の権力が強いほど開放性が高まる ((a)の場合)。逆に政治体との近接性が低い場合、政治体の権力が強いほど閉鎖性が高まることになる ((b)の場合)。また政治体の権力の強さに

関係なく、運動体との近接性が高いほど開放性が高まる ($(c_1), (c_2)$) の場合)。もちろん2つの次元が完全に独立であるとは限らない。権力が強ければ近接性が低くなり、権力が弱ければ近接性が高くなるという関係があることは十分考えられる。しかし本稿では、2つの次元間の関係については取り扱わない。

4. 進化ゲームモデル

4.1. モデルの構造

それでは具体的にモデルによる分析をおこなっていくが、本稿では進化ゲームによるモデル分析をおこなう。ここで進化ゲームを採用する理由は、大きく4つある。第1に政治体と運動体の相互作用として、社会運動を定義することができる。先に述べた政治的機会構造の影響を分析するためには、政治体と運動体の相互作用として、定式化する必要がある。そのためゲーム論は最も有効なモデル化の方法であると考えられる。第2に動学的な変化を捉えることができる。時系列的な運動の変化を分析することができる。従来のゲーム論は均衡分析が主であり、時系列的な戦略の変化を分析することが難しかった。しかし進化ゲーム論においては、時間的にどのように変化していくのかが分析の一つの特徴である。そのため、抗議サイクルのような時系列的な変化を捉えるためには、きわめて有効な手段であると考えられる。第3に集団を扱うことができる。ゲーム自体は一対一でおこなわれるが、集団内の戦略分布を表現することができる。抗議サイクル研究の主流であるイベント分析は、さまざまな運動体の抗議イベントの総数の変化を分析対象としている。それは、運動体全体のうち、どのくらいの比率の運動体が運動をおこしているのかを表現できる進化ゲームと、扱う対象がかなり近い。第4に強い合理性を想定しなくてよい。時系列的な変化を分析する場合、従来のゲーム論では遠い未来まで予測した上で、現在の戦略を考えることが前提となっていた。しかしそうした仮定は現実に照らしたとき、強い仮定である。現実の社会運動は遠い未来まで政治体の動きを予測しているとは考えにくい。進化ゲームは、そうした従来のゲーム論の強い合理性の仮定を放棄し、よりゆるやかな合理性を仮定したモデルとなっている。

進化ゲームは、基本的に次のような仮定をおく。(1)プレーヤーの数は無数である。(2)2つの個体間で一対一のゲームをおこなう。(3)プレーヤーは可能な戦略の有限セットを持っている。(4)毎回集団中からランダムに選ばれたペア同士でゲームをおこなう。ただ単一の行為者の学習過程として解釈することもできる。基本的なモデルではプレーヤー数が無限であり、ランダムに選ばれたペア同士で数多くのゲームをおこなっていくことで、各戦略の構成比率が変化していく(石原・金井 2002)。

社会運動において、進化ゲームの前提が妥当するか検討しておこう。まず(1)のプレーヤー数については、運動体については現実的であろう。さまざまな運動体が政治体とのゲームをおこなっているという状況は想像できる。イベント分析が対象としているマクロな状況は、まさにこうした状況を念頭においていると考えられる。一方、政治体については、プレーヤー数が無数に存在していることは、一見非現実的である。本稿では政治体については一つ行為主体を想定する。政治体が一行為主体であるとしても、実際に同時に無数のゲームがおこなわれるとすれば、単一の行為主体によってそのゲームすべてに対応することは難しい。つ

まりそれぞれのゲームに対して政治体内の構成エージェントがゲームをおこなっていると考えることができる。実際、さまざまな社会運動に対する対応は、各部署、担当者が対応しているのであり、ゲームの分析上、政治体もまた無数に存在していると仮定することはそれほど不自然ではないだろう。(2)と(3)については、特に問題はないだろう。(4)のランダムなペアについては、現実社会では現実的ではないといえるかもしれないが、社会運動において常に同じペアの間でやりとりがあるとは限らず、ペアが時間を経るに従って変化していくことは十分考えられるので、モデルの出発点としては妥当するものと考えられるだろう⁽³⁾。

そこで、政治体と運動体の間の次のようなゲームを考えてみる。

(1) プレーヤー 単一の政治体と無数の運動体

単一の政治体制の中で、政治体が無数の運動体と対峙している状況である。

(2) ゲーム

ゲームは、政治体が財の配分案（つまり政策）を提示し、それを運動体が受け入れるか、否かを選択する状況を表現している。具体的にゲームは次のような過程をたどる。

- ①運動体が政治体の政策（配分案）を承諾するか、それに対して運動（抗議）するかの選択をする。
- ②「承諾する」を選択するとゲームは終了し、運動体は m_1 、政治体は p_1 の利得を得る。
- ③「運動する」を選択した場合、政治体は運動体の要求に対して、承諾するか拒絶するかの選択をする。承諾した場合、運動体は m_2 、政治体は p_2 の利得を得る。拒絶した場合運動体は m_3 、政治体は p_3 の利得を得る。

ゲームツリーは図3のようになる。

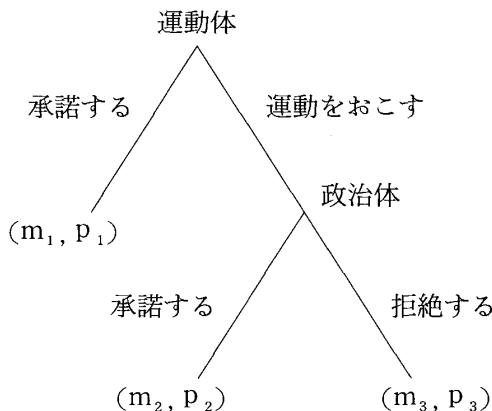


図3 ゲームの利得構造

次に政治的機会構造と利得の関係について検討していく。このモデルでは、一国内の抗議サイクルを念頭においているので、制度的構造の影響は除外する。そこで運動体と政治体の利得を、政治体内構造の開閉との関係で定義していくことにしよう。

まず、政治体内構造の開閉に影響を受けない利得から考えていく。運動体にとって、運動をおこしたにも関わらずそれが政治体に拒絶される状態は、政治体内構造の開閉とは関係なく、最も望ましくない状態である。また政治体の利得は、政治体内構造の開閉に関わらず、運動体が運動をおこさない状態が最もよい。

次に、政治体内構造の開閉と運動する利得について検討する。まず運動体と政治体の近接性については、政治体の利得と関係がある。近接性が高ければ、運動体が運動をおこしたとき、政治体は拒絶よりも承諾を選択すると考えられる。つまり、 $P_2 > P_3$ となる。逆に、近接性が低ければ、運動体の要求を政治体が受け入れることは考えられないので、拒絶する。つまり $P_2 < P_3$ となる。

次に政治体の権力の大きさについては、運動体の利得と関係がある。まず近接性が高い場合、政治体の権力が大きければ、政治体は運動体が運動をおこす以前に、そもそも運動体の要求を受け入れるはずなので、運動体が運動をおこす誘因は存在しない。つまり、 $m_1 > m_2$ となっている。逆に権力が小さい場合、近接性が高いとしても、政治体が運動体の要求を実現する力を持っていないと考えられる。次に近接性が低い場合、政治体の権力が大きければ、運動体の要求が政治体によって実現されている可能性は非常に低い。そのため運動体には、運動をおこす誘因がある。つまり $m_1 < m_2$ という関係があると考えられる。一方権力が小さい場合、運動体の要求を政治体は実現していないため、不満は潜在的に存在している。しかし強い権力を保持する政治体に比すれば、強硬な政策をおこなうことはできず、ある程度運動体の要求も受け入れいかざるを得ないと考えられる。そのため運動体にとっては、運動をおこす誘因が小さいものと考えることができる。つまり $m_1 > m_2$ となっていると仮定する。

以上を整理したのが、表1である。

表1 政治体内構造と政治体と運動体の利得

		近接性	
		低	高
		(a)	(d)
権力	大	$P_2 < P_3$ $m_1 < m_2$	$P_2 > P_3$ $m_1 > m_2$
	小	$P_2 < P_3$ $m_1 > m_2$	$P_2 > P_3$ $m_1 < m_2$
		(b)	(c)

図2と対照すると、(a)の場合に政治体内構造は最も閉鎖的であり、(d)の場合に最も開放的となる。

分析では、 m_i ($i = 1, 2, 3$)、 p_j ($j = 1, 2, 3$) のそれぞれについて、最も高い利得から3, 2, 1と割り当てて、運動がどのように増減していくのかを、検討していく。

通常進化ゲームの分析では、進化的に安定な戦略 (ESS) を導出するのが、定石である。しかし、本稿の目的は抗議サイクルであり、政治体と運動体の戦略の時系列的な変化である。そのため、本稿ではレプリケーター・ダイナミクスによって、政治的機会構造の開閉が運動体、政治体の戦略をどのように変化させていくのかを検討する。具体的に以下では、(a)から(d)までの各ケースについて、レプリケーター方程式により、運動体による運動をおこす戦略シェアと政治体による運動の要求を受け入れる戦略シェアの変化をベクトル場によって検討する。

4.2. レプリケーター・ダイナミクス

運動体が運動をおこす戦略を選択する比率（シェア）を x 、政治体が承諾する戦略を選択する比率（シェア）を y とする。このとき、標準レプリケーター方程式は、次のように表現できる（Weibull 1995）。

$$\begin{aligned}\dot{x} &= \{(m_2 - m_1)y - (m_1 - m_2)(1 - y)\}x(1 - x) \\ \dot{y} &= (p_2 - p_3)x(1 - y)y\end{aligned}$$

上記の式に基づき、政治体、運動体の戦略の変化をあらわすベクトル場を描いていった。図4から図7が、それぞれ(a)から(d)までの政治体内構造に対応している。図4から図7は、横軸は運動をおこす戦略を選択する運動体の比率、縦軸は運動の要求を受け入れる戦略をとる政治体（部署、担当者等）の比率である。図内の矢印は戦略の変化の方向をあらわしている。ここでは特に、運動する戦略を選択する運動体が存在しない状態（y軸上）から、運動をおこす戦略を選択する運動体の比率が増加する可能性を、それぞれの政治体内構造について検討する。具体的には運動体が運動しない状態において、政治体が受け入れる戦略を選択する比率が高い場合と低い場合について、見ていく。

(a) 近接性が低く、権力が大きい場合（図4）

政治体と運動体の間の近接性が低く、政治体の権力が大きい場合、政治体が運動体の要求を受け入れる比率が低いときには運動戦略が増加しない。しかし政治体が運動体の要求を受け入れる比率が高いならば、運動戦略は増加していく。しかしそもそも運動体の要求を受け入れることは、政治体にとって望ましくないので、その後政治体は要求を拒絶する戦略の比率が高まり、それに伴って運動戦略も減少していく。

(b) 近接性が低く、権力が小さい場合（図5）

政治体と運動体の間の近接性が低く、政治体の権力が小さい場合、政治体が運動体の要求を受け入れる比率が当初高いとしても、運動体が運動をおこしても政治体は拒絶するので、運動戦略は増加しない。また政治体が運動体の受け入れる比率が低い場合もまた、運動戦略は増加しない。

政治体と運動体の近接性が低い場合、政治体の権力が大きいときは運動が発生するものの、権力が小さいときには運動が発生しないのは、次のように解釈することができる。それは、権力が小さい場合、コストを払って運動をおこして得られる利益よりも、運動をおこさずに得られる利益のほうが大きい ($m_1 > m_2$) ためである。つまり政治体の権力が大きいと、運動体の利益に反する政策を強硬におこなうことができるため、運動体は運動をおこす誘因が発生するのである。逆に政治体に権力がない場合、運動体との近接性が低いとしても、政治体は運動体の利益に反する政策を強硬におこなうことができないため、運動体は運動をおこす誘因が小さい。

(c) 近接性が高く、権力が小さい場合（図6）

政治体と運動体の間の近接性が高く、政治体の権力が小さい場合、政治体の受け入れ比率がどのような状態であっても、運動戦略は増加していく。近接性が高いため、運動体による運動の要求を政治体が受け入れるという戦略が増加することで、運動体の運動戦略は増加していく。

(d) 近接性が高く、権力が大きい場合（図7）

政治体と運動体の間の近接性が高く、政治体の権力が大きい場合、政治体の受け入れ比率がどのような状態であっても、運動戦略はまったく増えない。これは政治体内構造が開放的なため、運動をせずとも運動体の要求を政治体が実現するためと解釈することができる。つまり、運動体には、運動をおこす誘因が存在しないのである。

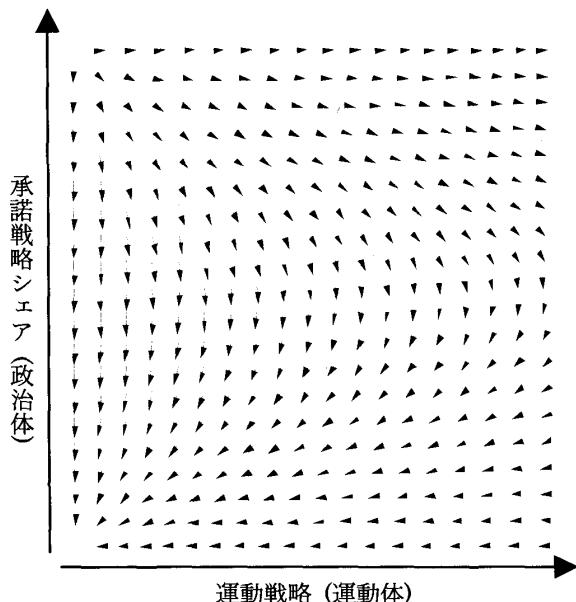


図4 近接性が低く、権力が大きい場合

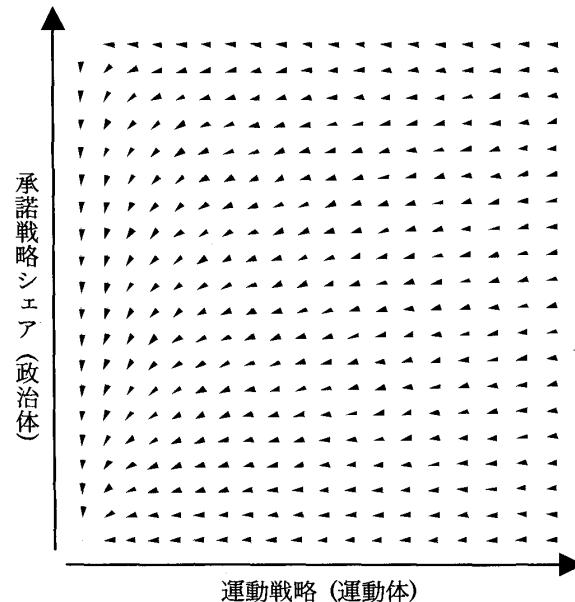


図5 近接性が低く、権力が小さい場合

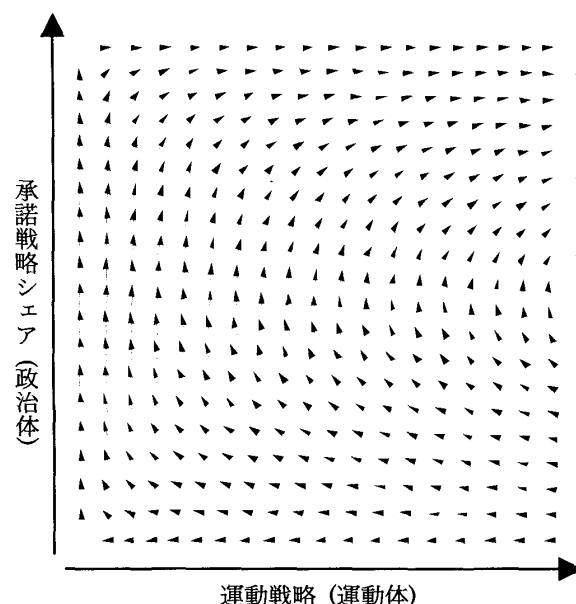


図6 近接性が高く、権力が小さい場合

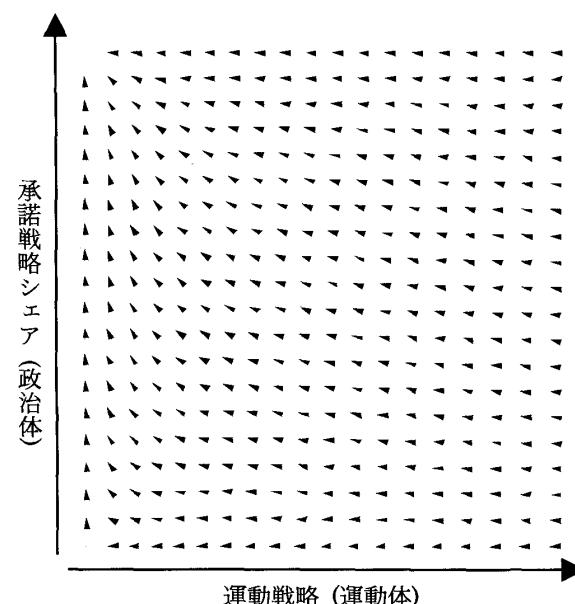


図7 近接性が高く、権力が大きい場合

以上の結果をまとめると、運動は2つの場合で増加しうることがわかる。第1に近接性が低く、政治体の権力が大きい場合であり、第2に近接性が高く、権力が小さい場合である。

次項でさらに、政治的機会構造と社会運動の関係について、考察していくことにしよう。

4.3. 政治的機会構造と社会運動

進化ゲームによる分析結果は、2つの側面から整理することができる。第1に運動発生という側面、第2に抗議サイクルの形成という側面である。

まず運動の発生に関しては、2つの知見にまとめることができる。第1に政治体内構造が全面的に開放的であると、運動は増加しないということである。つまり近接性が高く、政治体の権力が大きい場合、運動は発生しない。政治体内構造が開放しているということは、運動体の運動をおこす誘因を消失させているのである。第2に、政治体内構造が部分的に開放的な場合に運動が発生するということである。まず近接性が高く、政治体の権力が小さい場合、政治体内構造は近接性の次元では開放的であるが、権力の次元では閉鎖的であると見なすことができる。つまり政治体内構造は、開放と閉鎖が組み合わさった状態であることがわかる。次に、近接性が低く、政治体の権力が大きい場合は、政治体内構造自体は最も閉鎖的である。ただし運動が発生するのは、政治体が運動体の要求を受け入れる比率が高い場合である。つまり政治体が運動要求を一時的に受け入れる場合である。政治体内構造は閉鎖的であるものの、外圧や偶発的な出来事などにより、運動の要求を一時的にでも受け入れざるを得ないような状況にあるとき、運動は増加していく。以上をまとめると、政治的機会構造と運動の発生は単純な関係ではなく、政治体内構造の2つの次元の組み合わせによって、運動が発生したり、しなかったりすることがわかる。

次に抗議サイクルの形成に関しては、次の2つの条件においてサイクルが形成されることがわかる。第1の条件は、先の分析で明らかにした政治体内構造が閉鎖的な場合である。第2の条件は、政治体内構造が変化する場合である。つまり先に述べた運動発生のための2つの条件が満たされることで運動が増加した後に、政治体内構造が変化し運動が減少していく場合である。運動が減少していく条件は、政治体内構造の近接性が低い場合と、近接性が高く、かつ政治体の権力が大きい場合である。この結果を解釈すると、近接性が低い場合とは、低いことによって運動体が運動をおこしても、政治体がそれを拒絶するので、運動体は運動をおこす誘因がなくなっていく場合である。近接性が高く、政治体の権力が大きい場合は、先にも述べたようにそもそも運動をおこす誘因がない場合である。

以上が進化ゲームによる分析によって明らかになった知見である。ところでこれらの知見は、従来の研究に対してどのような貢献をしているのであろうか。おおよそ2つの重要な貢献をしているということができる。第1に進化ゲームによって、抗議サイクルのメカニズムを明示することができた点が挙げられる。第2に従来の研究では見いだすことのできなかつた抗議サイクルと政治機会構造の関係を明らかにすることできた点が挙げられる。

まず第1の貢献については、次のようにまとめることができる。例えば前述したように、Koopmans (1993, 1995) は、政治的機会構造の開放が運動の増加を作り出し、閉鎖が運動の減少を作り出すという関係があることを明らかにしている。抗議サイクルにおける運動増加期から運動衰退期にかけて政治的機会構造の状態が変化することで、サイクルが形成される。Koopmans や Torrow は、運動が制度化と急進化することで衰退すると述べている。こうした運動の二極分化は、進化ゲームによる政治体内構造が変化する場合の運動の減少条

件に対応している。つまり制度化は近接性が高くなる場合に、急進化は近接性が低くなる場合に対応しており、こうした二極分化が衰退を導くことは進化ゲームの分析結果とも一致している。本稿の分析は、こうした従来の知見を理論的に裏づけている。しかしただ単に従来の研究を裏づけているだけではない。開放と閉鎖の内容を特定し、開放、閉鎖がどのように利得に影響を与え、さらに政治体と運動体の行動に影響を与えていているのかを明らかにした上で、政治的機会構造と社会運動の関係を明らかにしている。さらに単に開放、閉鎖というだけではなく、部分的な開放、閉鎖が抗議サイクルにとって重要であることも明らかにしている。こうした点において、従来の研究に新たな知見を付加している。

第2の貢献については、次のようにまとめることができる。従来の抗議サイクル研究では、先にも検討してきたように政治的機会構造の変化が抗議サイクルを生み出すと考えられてきた。逆に政治的機会構造が変化しないならば、抗議サイクルはおこりえないという暗黙の前提があったものと考えられる。しかしモデル分析からは、必ずしも政治的機会構造（政治体内構造）の変化がなくても、抗議サイクルが生成されることが明らかとなった。つまり近接性が低く、権力が大きい場合に、抗議サイクルは形成される。確かにこの場合においても、政治体の戦略分布においては、政治状況は運動体に対して開放的である。しかし政治体の戦略分布は、政治的機会構造と呼べるような構造要因ではない。

例えは、東欧革命は政治的機会構造の開放によって、革命が発生したという議論がある（Obershall 1996）。確かにペレストロイカ以後、東欧諸国はソ連の後ろ盾を失うことで権力を弱め、政治的機会構造を開拓したといえるだろう。しかし政治的機会構造が急速に開放したとは考えにくいので（運動が拡大していくことで急速に政治的機会構造は開放していくとは考えられるが）、なぜ波が押し寄せるように革命が急速に広がっていったのかを、政治的機会構造の開放のみで説明することは難しいだろう。本稿が示した進化ゲームモデルの分析結果を解釈すれば、仮に政治体内構造が閉鎖的であっても、例えはペレストロイカの影響により、一時的にでも運動体の要求が受け入れられる（少なくとも弾圧されない）可能性が高まることによって、運動は急速に増加していくことがわかる。

5. 結 論

政治的機会構造の開放、閉鎖が社会運動の増減に影響を与えていたという、政治的機会構造論の議論は、社会運動研究に大きなインパクトを与え、90年代以降数多くの研究を生み出してきた。多くの研究者に支持された理由は、80年代以降の社会運動がおかれていた状況を説明する上で、政治的機会構造という概念が非常に有効であったからというの、間違いない。しかしそれ以外にも、社会運動発生への政治的要因の影響を単純化した点も重要である。つまり政治的要因を政治的機会としてとらえ、さらに開放、閉鎖という二値によって影響を特定しようと試みてきた。政治的機会構造論は、議論を単純化したこと、一般性の高い、さまざまな社会運動に適用可能な理論として、研究者に受け入れられてきたと考えができるだろう。しかしこうした単純化は、他方で政治的要因の複雑な影響を無視してしまうことになってしまったとも考えられる。

本稿の分析は、政治的機会構造の影響が単純なものではないことを明らかにした。さらに、

抗議サイクルについても、複数の政治的機会構造のパターンによって、形成されうることを明らかにした。こうした知見は、モデル分析をおこなうことではじめて明らかになった点である。もちろん、これらの知見は仮説の域を出ていない。今後はモデルから導出された知見を実証していく必要があるだろう。

注

- (1) 抗議サイクルのメカニズムを明らかにしようという試みがないわけではない。近年代表的な数理モデルとして、Oliver and Myers (2002 a, 2002 b, 2003) がある。彼らのモデルは、伝播モデルをベースにしており、組織間関係にやや力点をおいたモデルとなっている。また抗議サイクルと抗議レパートリーの関係についてのモデルとして、渡邊 (2000) がある。
- (2) 本稿では、詳しく取り上げないが McAdam (1995) に代表されるような運動の伝播を扱った研究もある。
- (3) 社会科学に進化ゲームをそのまま応用することについては、問題もある (神取 2002)。特に「生物進化の産物として人間行動を理解するというレベル (先天性レベル)」ではなく、「後天的に獲得される行動や属性がいかなる方向に引きつけられていくかというレベル (後天性レベル)」においては、レプリケーター・ダイナミクスで表現されるほど、単純な動きをとらないと指摘されている。それに対して合理的・限定合理的な行為者を想定する社会ゲームもある (松井 2002)。

文 献

- Brockett, Charles D. 1991. "The Structure of Political Opportunities and Peasant Mobilization in Central America." *Comparative Politics* 23 : 253-274.
- Edwards, Bob and Sam Marullo. 1995. "Organizational Mortality in a Declining social Movement : The Demise of Peace Movement Organizations in the End of the Cold War Era." *American Sociological Review* 60 : 908-927.
- Eisinger, Peter K. 1973. "The Conditions of Protest Behavior in American Cities." *American Political Science Review* 67 : 11-28.
- 石原英樹・金井雅之. 2002. 『進化的意思決定』 朝倉書店.
- 神取道宏. 2002. 「ゲーム理論と進化ゲームがひらく新地平——多彩な学問分野を通底する新しい分析手法」 佐伯伴・亀田達也編『進化ゲームとその展開』 共立出版 : 2-27.
- Koopmans, Ruud. 1993. "The Dynamics of Protest Waves : East Germany, 1965 to 1989." *American Sociological Review* 58 : 637-658.
- Koopmans, Ruud. 1995. *Democracy from Below : New Social Movements and the Political System in West Germany*. Boulder : Westview Press.
- Kriesi, Hanspeter, Ruud Koopmans, Jan Willem Duyvendak and Marco G. Giugni. 1995. *New Social Movements in Western Europe*. Minneapolis : University of Minnesota Press.
- 松井彰彦. 2002. 『慣習と規範の経済学』 東洋経済新報社.
- McAdam, Doug. 1982. *Political Process and the Development of Black Insurgency : 1930-1970*. Chicago : University of Chicago Press.
- McAdam, Doug. 1995. "Initiator' and 'Spin-off' Movements : Diffusion Processes in Protest

- Cycles." Pp. 217-239 in *Repertoires and Cycles of Collective Action*, edited by Mark Traugott. Durham and London : Duke University Press.
- McAdam, Doug. 1996. "Conceptual Origins, Current Problems, Future Directions." Pp. 23-40 in *Comparative Perspectives on Social Movements : Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings*, edited by Doug McAdam, D. John McCarthy, and Mayer N. Zald. Cambridge : Cambridge University Press.
- McAdam, Doug, John McCarthy, and Mayer N. Zald eds. 1996. *Comparative Perspectives on Social Movements : Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Meyer, David S. 1993. "Protest Cycles and Political Process : American Peace Movements in the Nuclear Age." *Political Research Quarterly* 46 : 451-479.
- Minkoff, Debra C. 1997. "The Sequencing of Social Movements." *American Sociological Review* 62 : 779-799.
- 野宮大志郎. 1998. 「政治的機会構造・経済構造・イデオロギー——幕末日本の農民運動」『理論と方法』Vol.13, No.1 : 23-40.
- 野宮大志郎. 1999. 「社会運動の比較研究——その動向と方法論的諸問題」社会運動論研究会編『社会運動研究の新動向』成文堂 : 115-140.
- 野宮大志郎. 2001. 「社会運動と文化——なぜ運動の「文化」的研究なのか」野宮大志郎編『社会運動と文化』ミネルヴァ書房 : 1-26.
- Oberschall, Anthony. 1989. "Opportunities and Framing in the Eastern European Revolts of 1989." Pp. 93-121 in *Comparative Perspectives on Social Movements : Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings*, edited by Doug McAdam, D. John McCarthy, and Mayer N. Zald. Cambridge : Cambridge University Press.
- Oliver, P. E. and D. J. Myers. 2002a. "Formal Models in Studying Collective Action and Social Movements," Pp. 32-61 in *Methods of Social Movements Research*, edited by Bert Klandermans and Suzanne Staggenborg. Minneapolis : University of Minnesota Press.
- Oliver, P. E. and D. J. Myers, 2002b, "The Coevolution of Social Movements," To be presented at Harvard 10/29/02 and at PCS at Wisconsin 11/19/02.
- Oliver P. E. and D. J. Myers, 2003, "Networks, Diffusion, and Cycles of Collective Action," Pp. 173-203 in *Social Movements and Networks : Relational Approaches to Collective Action*, edited by Mario Diani and Doug McAdam. Oxford : Oxford University Press.
- Rucht, Dieter. 1996. "The Impact of National Contexts on Social Movements Structure." Pp. 185 -204 in *Comparative Perspective on Social Movements : Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framing*, edited by Doug McAdam, John McCarthy and M. N. Zald. Cambridge : Cambridge University Press.
- Tarrow, Sidney. 1989. *Democracy and Disorder : Protest and Politics in Italy, 1965-1975*. Oxford : Oxford University Press.
- Tarrow, Sidney. 1994. *Power in Movement : Social Movements, Collective Action and Politics*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Tarrow, Sidney. 1995. "Cycles of Collective Action : Between Moments of Madness and the Repertoire of Contention." Pp.89-115 in *Repertoires and Cycles of Collective Action*, edited by Mark Traugott. Durham and London : Duke University Press.
- Tilly, Charles. 1978. *From Mobilization to Revolution*. Reading, Mass : Addison-Wesley.

- Traugott, Mark ed. 1995. *Repertoires and Cycles of Collective Action*. Durham and London : Duke University Press.
- 渡邊 勉. 2000. 「抗議サイクルと抗議レパートリー——運動組織選択の合理的選択モデル」木村 邦博編『合理的選択理論の社会学的再構成』(科学研究費補助金 基盤研究(B)(1)研究成果報告書) : 99-114.
- 渡邊 勉. 2002. 『政治構造と社会運動——社会運動の合理的選択理論』(東北大学大学院文学研究科 博士学位論文).
- 渡邊 勉. 2004. 「社会運動のフォーマル・モデル——政治的機会構造のメカニズム」曾良中清司・長谷川公一・町村敬志・樋口直人編『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』成文堂 : 115-155.
- Weibull, Jorgen W. 1995. *Evolutionary Game Theory*. Cambridge : MIT Press. (大和瀬達二(監訳). 1998. 『進化ゲームの理論』文化書房博文社)
- Whittier, Nancy. 1997. "Political Generations, Micro-Cohorts, and the Transformation of Social Movements." *American Sociological Review* 62 : 760-778.